



井上 孝 編著

歯科医師とスタッフのための臨床検査 安全な口腔保健・医療に向けて

日本歯科大学東京短期大学
野村正子（歯科衛生士）



B5判/164頁
定価 5,880円
(本体 5,600円+税 5%)
医歯薬出版刊
(2012年5月発行)

「医科」と「歯科」は、長い間別々に教育されてきましたが、本来の意味での「チーム医療」の時代になったと確信します。

1つには、歯周病と全身疾患の関係が次々と明らかになるにつれて、ペリオドンタル・メディシン（歯周医学）という概念が定着したことです。これは歯周治療を行う際、患者さんの全身の病態をつねに念頭に置いて行わなくてはならないということです。

2つには、周術期における口腔管理の重要性が認識されて、入院前後や入院中、さらには放射線治療や化学療法を実施する患者さんの口腔機能の管理が、きちんと評価されるようになったことです。歯科医師だけでなく、歯科衛生士による専門的口腔衛生処置にも、保険点数が算定されるようになりました。すでに病院の周術期センターで術後肺炎などの合併症予防に奔走している歯科衛生士もいます。このような現場では歯肉縁上のプラークコントロールのみならず、歯肉縁下処置も短期集中で行わなければなりません。医療職と

しての歯科衛生士の腕の見せどころでもあります。

考えてみれば、超高齢社会の現代において、患者さんの全身状態を理解せずに歯科治療だけ行うことは危険です。患者さんの多くは何らかのリスクをもっており、全身状態を把握せぬ（できぬ）まま歯科治療だけを行う歯科医療従事者は、危険と隣り合わせといえるのではないのでしょうか。知らなかったではすまされない訴訟例も散見されます。そのような事例をみると、歯科医療の安全のためにも、まずは全身状態を読むことができれば、対処もできないことがわかります。さらに全身状態が読めることで、口腔から全身への貢献もできるのだと思います。歯科医療従事者も、全身の主要なデータを読めなくてはならない時代がきたのです。

本書は、歯科医師とスタッフのために書かれた臨床検査の本です。これに先んじて『最新歯科衛生士教本 臨床検査』という教本が、歯科衛生士教育用として出版されていますが、現役の歯科医療スタッフにも、わかりやすく読み応えのある内容となっています。

前半は、さまざまな臨床検査の内容を広く説明しており、後半は、口腔領域に限定した検査を網羅しています。最終章の主要な疾患や病態別の検査値についての説明も興味深いので、ぜひ一度手にとって、まずは自分の興味のあるところや実際の受けもち患者さんの病態に関するところから、読み進めていただきたいと思います。必ず実力のつく一冊だと思います。